

所 長 講 演

講 演：梅原 猛（国際日本文化研究センター）

日 時：1994年10月21日(金)
14時～15時

場 所：国際日本文化研究センター講堂

日本の思想

—神道と仏教—

梅原 猛 (国際日本文化研究センター)

UMEHARA Takeshi

私の講演の題目は「日本の思想」ということでありますが、日本の思想を明らかにするには日本の宗教を明らかにしなければなりません。ところが、日本の宗教は世界の人には甚だ分かりにくいのであります。

一つの国の文化を知るには、その国の宗教を知らねばならぬといわれます。西欧の文化を知るにはやはりキリスト教を知らねばなりません。キリスト教を知ることはそれほど難しいことではないかもしれません。聖書を読めばだいたいのことが分かります。ところが日本人の宗教を知るには、それを知ることのできる一定の聖書というものがありません。

もしも日本人の宗教を神道と仏教とするとすれば、神道にはその宗教的原理を解明した聖書というものが存在していません。仏教のほうはたしかに釈迦が説いたという経典があり、また日本の祖師が書いた聖典がありますが、日本では仏教の宗派が大変多くあり、その宗派がそれぞれ尊崇する経典と祖師の書物をもっています。共通の仏教経典というものは全くなく、しかもその宗派で説かれる教義は実際に日本人が信じている信仰と必ずしも一致しません。

こういう状況の中で外国人にとって日本の宗教を知ることは大変困難であります。また日本の宗教学者も多くそれぞれ神道や仏教の諸宗派に属していて、日本の宗教を概観するような書物を書いておりません。

こういう状況の中で、日本の宗教を神道あるいはある仏教の宗派で説明することが甚だ明晰であり、甚だ魅力的な試みであるように思われます。その例として、鈴木大拙の説があります。鈴木大拙は、大乘仏教、特に禅仏教を西欧世界に知らしめた偉大な思想家であります。彼は『禅と日本文化』という本を書き、あたかも日本文化がすべて禅で説明されるかの如き説を主張しました。禅仏教はたしかに一つのすぐれた仏教であります。必ずしも日本の文化はもちろん、日本の仏教がすべて禅仏教で説明されるというものではありません。私は、鈴木大拙は大乘仏教を普及するのに大きな役割を果たしましたが、また世界の人に日本文化を誤解させる種をまいたのではないかと思います。

これから私は、日本の学者が決してしようとしないう、神道と仏教を含めて日本の宗教を概観するお話をしたいと思います。その前に、日本という国の成り立ちについて少しお話ししたいと思います。

旧石器時代に日本に人が住んでいたことは約20万年、あるいは30万年前のものとされる石器の発見によって明らかであります。その日本に土着していた古モンゴロイド系の旧石器人が約1万3千年ほど前に土器をその生活に採用しました。その土器は今のところ世界でいちばん古い土器ですが、その土器の多くには縄で文様がつけられているので、「縄文土器」と名づけら

れました。この時代の日本人は狩猟採集生活をしていたことは間違いありませんが、周囲を海に囲まれ、気候温暖で雨に恵まれた日本列島は狩猟採集生活としては生産性が高く、そこに住む日本人は豊かな縄文文化なるものを享受していたことは間違いありません。

私は、この縄文文化が日本文化の基層を成していると考えますが、紀元前約3世紀頃に稲作農業が大陸から渡来し、紀元約3世紀までに稲作農業は日本に定着しました。これは単に農業の渡来ではなく、土着している古モンゴロイド系の民族と違った新モンゴロイド系の稲作民の渡来であったことが現在科学的に疑い得ない事実となっています。この稲作農業の起源についても、最近続々中国で古い農業遺跡が発掘され、稲作農業は1万2千年の起源をもつといわれる小麦農業と比べればやや遅いが、約9千年前には始まっているという証拠が発見されています。

この稲作農業は、養豚を除いては牧畜を伴いませんが、その成立の初めから蚕を飼い、シルクの生産をしています。揚子江の流域で稲作農業が発展し、ちょうど近東において都市文明が起こった今から5千年ほど前に都市文明を作り出したと思われます。この稲作農業文化がやや遅れて多数の移民と共に日本にやってきて、その稲作農耕民が土着の狩猟民を征服して国家を造ったのが日本の国家であります。この稲作民の使った土器をその土器の出土地にちなんで「弥生土器」といい、この稲作到来時代を弥生時代といいます。

日本の神話では、日本は天つ神が国つ神を征服して造った国であるという旨が書かれていますが、これは、日本はインドに似て、外から来た民族が土着する民族を征服して造った国であることを示しています。ただこの場合、征服者と非征服者がアーリア族とドラビダ族のように全く異なった民族ではなく、旧と新の違いはあるものの同じモンゴロイドであることが、かつては存在していたカースト制を比較的容易に消滅させた原因であります。このカースト制の消滅に仏教が大きな役割を果たしたことは後で述べます。

こうして日本が農業化した時代が終わると、日本統一の時代がきます。それを一応4世紀と考えると、日本国家は稲作農業を基礎におく国家であると考えられます。そしてそういう状況が19世紀半ばまで続きました。19世紀半ばに日本は国の方針を180度転換して、西欧文化を移入し、日本を近代化することに全力を挙げました。こうして日本は工業国家に生まれ変わり、今日の如き経済発展を可能にいたしました。

私はこのようにごく大まかに日本の歴史を概観しましたが、それは日本の土着の宗教と思われる神道なるものの位置づけをはっきりしたかったからであります。神道というと、日本以外の他の国、特に韓国、中国、東南アジアの諸国には悪い思い出があります。それは、戦争中に日本が神道を超国家主義的イデオロギーとして利用したからであります。このような超国家主義的イデオロギーとしての神道は18世紀の末に作られ、20世紀初めに日本国家のイデオロギーになります。

私は、それは多分に当時西欧で流行していた国家主義、プロイセン主義、あるいはナポレオン主義が伝統的な日本の宗教である神道の形をとって表れたものであると思います。私もこのような超国家主義的なイデオロギーである神道に強い反発をもち、長い間神道に対するアレルギー反応を免れませんでした。

このような神道の国家主義化は7世紀末から8世紀初めにかけて形成された日本の神道にも認められます。7世紀末から8世紀の初めは、日本の支配者が日本を中国並みの律令国家に変貌させようとする情熱に憑かれていた時代であります。この時代にできた神道が禊ぎ・祓いの神道で

ありますが、禊ぎ・禊いの神道は国家に有害な人間を禊う、つまり追放してしまい、禊ぐ、つまり罰金を払わせることを思想的に合理化する神道であります。

この時代に日本の天皇の祖先であるアマテラスオオミカミを祀る伊勢神宮ができましたが、このような神道は天皇制を合理化し、天皇を首長とする国家に反逆する人間を追放したり、死に至らしめることを合理化する神道であります。それゆえそれは既に国家主義的傾向の神道ですが、20世紀の国家神道のような超国家主義的イデオロギーではありません。このように考えると、神道は7～8世紀においてと19～20世紀において、二度にわたる国家主義的変質を経験したといわねばなりません。

神道からこのような国家主義的イデオロギーを取り去れば何が残るでしょうか。神道の原形は何でしょうか。

このような問いを問うとき、われわれは神道の原形を縄文時代の宗教に求めようとする誘惑を抑えることができません。神道はその源流を弥生時代を超えて縄文時代の宗教にもっているのではないのでしょうか。

日本の本州、四国、九州の文化よりはるかに縄文時代の文化をよく保存している文化があります。それは日本の辺境、北海道に存在するアイヌ文化と沖縄に存在する琉球文化であります。アイヌ及び琉球の人はかなり遅くまで稲作農業をとり入れず、狩猟採集の生活を続けました。この点で彼らを日本の狩猟採集民、縄文人の後裔とみて差し支えないと思います。とすれば、このアイヌと沖縄の文化に縄文の文化の名残が残っていると考えねばなりません。私は、何よりもアイヌの宗教とそれに甚だよく似ている沖縄の宗教を日本の神話の研究や民俗の研究と考え合わせて、縄文時代の日本の宗教について多少の理論的解明を得ることができました。

この推論の詳細についてここでお話することはできませんので、結果だけをお話します。私は、このアイヌや沖縄の宗教の中に残っている縄文時代の宗教はだいたい二つの原理によってでき上がっていると思います。

一つは、人間と他の動物はいずれもこの地球の平等な住民であり、人間が他の動物に優れた何らの優越的原理を所有しないということでもあります。アイヌの考えによれば、熊は人間の世界にやってきた客人であり、天の彼方にあると思われるあの世においては人間と同じような形をし、人間と同じような家族生活を送っています。しかし熊は人間のところへ来たときに「ミヤング」(土産)として皮や肉を携えて来たのであり、本来は人間の姿をしているといわれます。

こういう考え方においては人間も熊も樹木もすべて平等であり、この世界で仲よく共存していくべきのものであります。アイヌにとってしばしば樹木や動物が神ですが、人間もそういう植物や動物の神を敬い、その神々たちと共存していくのがもっとも大切なことと考えられます。

共存と並んでもう一つの原理が循環であります。アイヌにおいても沖縄においても、すべての生きとし生けるものは永遠にその魂が生と死を循環するものであると考えられます。人間が死ぬとその魂は肉体を離れ、祖先の待っているあの世へ行きます。あの世はこの世とあべこべなところであり、あの世の冬はこの世の夏、あの世の夏はこの世の冬というふうに万事あべこべであります。この世と大して違ったところではありません。

人間が死ぬと、一足先にそこへ行った父母が待っているあの世へ行きます。この場合、すべての人間があべこべへ行けることができ、キリスト教のような天国、地獄の区別、及び仏教のような極

楽、地獄の区別はありません。よいことをした人も悪いことをした人もすべて同じようにあの世へ行くことができるとすれば、かえって不平等であるということになりますが、よいことをした人と悪いことをした人の区別は、この世へ帰ってくる早さによって報われます。つまりよいことをした人は早くこの世に帰り、悪いことをした人は遅くこの世に帰るといわけです。

あの世とこの世は一応分けられています、あの世の人がこの世へ来たり、この世の人があの世へ行ったり、この世とあの世は絶えざる往還の関係があります。

日本ではお正月と並んでもっとも大きな祭日がお盆であります、お盆というのは、あの世の人、つまり先に死んだご祖先様がこの世に帰り、この世の子孫たちと一緒に食事をしたり遊んだりするときであります。日本ではこのお盆の頃にお祭りや踊りをするのが多いのですが、これはご祖先様の霊を楽しませると共に自らも楽しむためであります。

実は、お正月も昔はこのようにご祖先様を迎える祭りの日、日本人がお正月に家の前に立てる門松は、ご祖先様の霊がそれを目印にして降りてくる霊の依り代であります。

このお盆やお正月は霊の一時帰休であります、もっと長い期間の帰国があります。たとえばA家の父とB家の母の間に子供ができるとします。するとあの世のA家のボスとB家のボスが話し合い、あの世にいる誰をこの世に帰すかを決めます。そしてあの世にいるA家、B家の人の中の誰かが選ばれます。するとその人の霊はあの世から飛んできて、子供を宿した母胎に入ります。そして月満ちて子供が生まれると、この子は七年前に亡くなったおじいさんにそっくりだ、きとおじいさんの生まれ変わりにちがいない、とおじいさんと同じ名前がつけられるのであります。

少し前まで、アイヌや沖縄ではそのような信仰が強く生きていました。そして日本の本島でも、アイヌや沖縄ほどに明確ではありませんが、それに近い信仰が生きていたのであります。日本人は個人の墓をほとんど作りません。日本人は死ねば〇〇家の墓に入ります。そこに入れば、あの世でも同じところへ行き、この世と同じような家族生活を送り、また〇〇家の子孫となってこの世に生まれてくることができると考えられています。

もしもこういう考えをとるならば、この世も仮の住まい、あの世もまた仮の住まいであり、魂はこの世とあの世の間で無限の旅をしているわけであり、日本におけるもっともすぐれた詩人である松尾芭蕉の「月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり」という『奥の細道』の冒頭の言葉はこのような思想を語っていると思われま。

古代日本人にとって、太陽も生と死の間を旅する旅人なのであります。夕方、西に落ちる太陽は今から死の世界に入ろうとする太陽であり、朝方、東から出る太陽は死の世界から甦った太陽であり、夕方の太陽と朝方の太陽がとりわけ多く崇拜されます。月もまた満ち欠けがあり、生死を繰り返すことは明らかであります。既に太陽や月がそうである以上、この世界にあるすべてのものがこのような生から死、死から生への永遠の旅を続けていく旅人であり、人間もまたそのような旅人の一人であることは間違いありません。

このような信仰は縄文時代以来徐々に希薄になってはいますが、今でもどこか心の奥に存在する日本人の信仰であると思います。もちろん今の日本人がそのようなはっきりした信仰をもっているわけではありませんが、日本人が行っている宗教儀式を見ると、やはりこのような信仰が存在しないとその儀式は意味をもたないように思います。

日本のいちばん大切な儀式は葬式であり、一時代前まで、特に田舎では葬式に莫大な費用がかかりました。この点はアイヌでも同じですが、やはり葬式は霊を無事にあの世に送る大変重要な宗教的儀式であります。霊を無事あの世へ送ることがなければ、霊が無事この世に再生することがあり得ません。今の日本では、人間の霊をあの世に送り、無事にあの世の人とするという儀式、つまり葬式や年忌供養やお盆の行事は主に仏教が司るところであります、再生のほうは神道が司るところであります。

日本人にとって神道がいちばん身近に感じられるのは、結婚式という儀式が神主さんによって執り行われるときであります。霊がこの世に帰るには、男女の結合と出産、そして成長という過程をとらねばなりません、この結婚や出産や成長を示す七五三のときは神社に参ります。おそらく昔はこの宗教的儀式をすべて神道が行っていたと思いますが、仏教が移入され、いちばん重要な部門、いちばんお金になる部分を仏教が占め、あまりお金にならない部分を神道に残したのであると私は思います。

このようにみると、縄文人の宗教はいまだ現代の日本人の心の中にも生きているということが出来ます。私は、このような共存と循環の信仰は狩猟採集時代、すなわち縄文時代の日本にだけ存在するものではなく、旧石器時代の共通な人類の思想的原理であったのではないかと思います。

エドワード・タイラーによって原始社会の宗教として明らかになったアニミズムと日本の神道はほとんど変わりはないと思います。私は、タイラーが原始社会の宗教をアニミズムと定義したことには賛成であります、彼がアニミズムを幼稚な宗教原理で、現代において全く意味をもっていないとする点においてタイラーと意見を異にするものであります。このような思想は一見甚だ非科学的なものであります、それは現代の科学が明らかにした遺伝子の不死ということの神話的な説明ではないかと思います。

われわれの遺伝子は間違いなく子孫に遺伝され、子孫が生き永らえるかぎり、その遺伝子は永遠であります。遺伝子は、個体が生き変わり死に変わりしてもなお生き続けるものであるとすれば、魂の不死を遺伝子の不死に置き換えれば、それはデカルトのような考える我のみを認め、死後は無であるとする近代的世界観よりはるかに科学的であると思います。

神道の話はこれくらいにして、仏教の話に移りたいと思います。仏教は前5世紀にインドのガンジス河の流域で活動したゴータマ・シッダルタの教えをもとにして発展した思想体系であります。キリスト教のように一定の聖典はなく、釈迦が亡くなって500年も1千年経っても釈迦の名の下に次から次へと新しい経典が作られていきました。それゆえ仏教といっても一つのものではなく、ギリシャに始まる西洋の思想の流れのように変化極まりないものであります。

釈迦の説いた教えはだいたい次のような教えでありました。人生は苦である。苦の原因は愛欲である。愛欲を減ぼさねばならぬ。愛欲を減ぼすには、戒律を守り、瞑想をし、智恵を研かねばならぬ。これはほとんど宗教といえないような倫理的な教えであります。釈迦はこのような教えを説いて死にましたが、この釈迦の教えにしたがって、初期の仏教徒は人里離れた山深いところで集団生活を送り、愛欲を克服して、ニルバーナすなわちもはや心が何ものにも動かされない状態に入ろうと努力しました。

しかし紀元1世紀、新しい仏教運動が起こりました。それが大乘仏教であり、中国や韓国や日本で流行したのはこの大乘仏教です。大乘仏教では釈迦の伝統を守る仏教を小乗仏教といって蔑

視します。小乗というのは小さな乗り物、大乘というのは大きな乗り物であり、大乘仏教の教えのほうが小乗仏教よりはるかに楽で、はるかに早くニルバーナに達するというわけであります。この大乘仏教を大成したのは龍樹すなわちなガルジュナであります。ナガルジュナは、小乗仏教をあまりに人生に対して消極的すぎる、そして人生あるいは愛欲に対して否定にも肯定にもとられない空という行動的な原理に立つべきであると主張しました。

この大乘仏教がまたその中でさまざまに発展し、それが中国及び韓国を通じて日本に6世紀の半ばに移入されました。ここで私は二つの問いを問わねばなりません。一つは、仏教は日本に何を与えたかという問いであります。もう一つは、日本にもっとも大きな影響を与えたのはどのような仏教であり、また日本において仏教はどのように変質したかという問いであります。

仏教が日本社会に与えた決定的な影響はいくつかありますが、もっとも大きな影響は、仏教が平等の原理を主張し、日本における階級的差別を撤廃するのに役立つということにあります。

釈迦仏教は初めから四姓平等という原理を、愛欲を克服し、涅槃に入るといふ原理とともに重んじました。仏教が日本に入ってきたとき、日本は氏姓社会でありました。それは稲作農耕民が日本に渡来し、土着の狩猟採集民を征服して国を造り、そこでできた支配、被支配の関係を永続化しようとしたインドのカースト制にやや似た制度であります。仏教はそのようなカースト制度を撤廃し、日本を平等化しようとする原理として働きました。

このように仏教を日本に定着させることにもっとも大きな影響力をもったのは、7世紀初頭に活躍した聖徳太子であります。聖徳太子は、日本に中国の如き律令社会を作ろうという理想に燃えた人であり、能力があれば誰でも出世できる律令制を能率的に運用するにはこの身分制の枠を取り払うべきであると考え、彼は氏姓の高低にかかわらず人間を起用しました。彼は日本に律令制を確立させるためにも仏教の平等の原理が必要であると考えました。この傾向は8世紀の後半に活躍した日本最大の仏である東大寺の大仏を作った聖武天皇とその子、孝謙女帝の代になります。ますます進み、天皇は低い姓の人にむやみに高い姓を与えたために、氏姓制は意味を失います。

そして9世紀以後になると、姓制はますます形式化し、ほとんど意味をもちません。そしてそれ以後も人間の平等を説く仏教者が出て、平等思想はますます日本の底辺にまで及びます。

そして14、5世紀になると、下剋上という運動が起こり、社会的にいちばん低い身分の人間が上の身分に至るといふ現象が起きますが、それには仏教思想の影響があることは否定できません。17世紀になると、再び身分社会が復活しますが、その身分社会は人為的に作られたもので、基礎が弱く、19世紀後半に西洋のデモクラシー思想が入ると、跡形もなく崩壊しました。今日の日本は階級変動が甚だ激しい社会であり、もっとも平等の原理が実現されている社会であるという学者もいます。

日本が近代化に成功したのは、日本が科学技術文明を学びとる知的好奇心を十分にもっていたことでもあります。同時に西洋のデモクラシー思想を容易に受け取る素地があったからであります。私は、この素地を作ったのは仏教であると思います。

仏教が日本に与えた影響はまだいろいろありますが、言及している時間がありませんので、日本に移入された仏教はどのような仏教であり、またそれが日本に移入されてどのように変質したかを語ることにします。

日本に移入された仏教は大乘仏教であります。初めに移入された仏教は主として当時中国で流

行していた仏教であり、インドの大乗仏教の教義を忠実に保存している仏教であります。インドにおいて、先に述べました大乗仏教の創始者と思われる龍樹の後、3世紀頃に無着、世親という兄弟が出て、甚だ精密な仏教学を生み出します。それはフロイトの精神分析学にも似た人間の心の精密な分析であり、このような心の構造を深く認識することによってニルバーナに達しようというのであります。

このような龍樹風、あるいは世親風の仏教が7、8世紀に日本で流行しますが、9世紀になると新しい日本仏教の創始者が現れます。それは、比叡山という都近くの山林に延暦寺という寺を建て、中国の天台仏教の根拠地を日本に作った最澄と、少し都から離れていますが、比叡山以上の鬱蒼たる森の中にある高野山に金剛峰寺という寺を建て、当時中国で流行していた真言宗という宗派の日本における根拠地を作った空海であります。

真の日本仏教はこの最澄、空海から始まると思いますが、10世紀半ばを過ぎると、天台宗のほうも密教化され、日本仏教は深く真言密教の影響を被ります。

この日本仏教にもっとも大きな影響力をもつ真言密教というのはいかなる仏教でありましょうか。それは大乗仏教の発展の最終段階に生まれた仏教であります、その仏教は大きな特色を二つもっているように思います。

一つは、甚だ大胆な愛欲の肯定であります。この愛欲の肯定は、土着のヒンズー教の影響もあると私は思います。もう一つの真言密教の特徴は、それが崇拝する仏は人格神としての釈迦という仏陀ではなく、大日という仏陀であったことであります。

仏教は初めは釈迦崇拝から始まりましたが、大乗仏教が出現するや、釈迦の前世の仏陀がいろいろ作られ、また釈迦の性質がさまざまに分化され、次々と新しい仏陀を生みました。真言密教のもっとも中心的な仏陀である大日如来は、その名の如く太陽を神格化したものであります。そこで崇拝の対象となるのは人間であるよりむしろ自然であります。一切の生きとし生けるものを育てはぐくむ、そういう自然そのものが大日如来として結晶されました。

このような仏教が日本人に甚だ受け入れやすかったのはきわめて当然なことでもあります。日本人は昔からこの世を大変よいところだと思っていました。そしてあの世もまたこの世の延長であり、あの世からこの世に帰ってくるのは甚だ願わしいことであると思われたわけであります。こういう性情の日本人に、釈迦の教えのような人生は苦であり、この苦から逃れてもう二度と生まれ変わらないほうがよいなどという思想は甚だ受け入れることが難しいのであります。

そういう仏教に代わって、愛欲を肯定する密教は日本人にとって甚だ受け入れやすい仏教であったと思いますが、密教が人間神である釈迦より自然神である大日如来をより根本的な仏とする点において、もっとも日本人の共感を得たのではないかと思います。そしてその自然神である大日如来は日本の鬱蒼たる森の中にある神と共生することになりました。このような鬱蒼たる森を根拠地とする平安仏教によって、日本の神道と仏教とが共存する原理が確定しました。

このようにして天台仏教と真言仏教が融合し、11世紀において「天台本覚論」という思想を生み出します。その思想は「山川草木悉皆成仏」という言葉で表現されます。つまり山や川や草や木が仏になる性質をもっていて、仏になることができるというのであります。これは釈迦仏教からみれば大変な逸脱であります。釈迦仏教では、仏になることのできるのは人間のみであり、人間の中でも特別な人間が厳しい修行をし、智慧をみがいてやっと仏になれると考えられますが、

このような「天台本覚論」では、すべての人間が仏になれるばかりか、動物や植物、すなわち草や木ばかりか無機物と考えられる山や川すら仏になれるというのであります。

このような思想は中国仏教にないことはないのですが、日本にきて大きく開花します。私は、このように仏教が日本において人間中心から自然中心へと大いに変容したのは神道の影響があったからではないかと思えます。神道においては、先に述べたように動物も植物も山や川すらあの世においては皆人間と同じような生活を営んでいます。日本の仏教では、人間が死ねばすべて仏になったと言い、鰻や蟹ばかりか、針や人形の供養をしますが、これも「山川草木悉皆成仏」という考え方によると思えます。

日本仏教が大きく展開するのは13世紀であります。13世紀になって初めて日本独自の仏教が生まれたという学者がいます。この13世紀に生まれた仏教は三種類であります。一つは浄土宗あるいは浄土真宗、一つは禅宗であり、もう一つが日蓮宗であります。この仏教はすべて、人間が誰しも仏になることができるもっとも簡単な方法を説きます。浄土宗は口で「南無阿弥陀仏」と称える口称念仏によって、禅宗は座禅によって、日蓮宗は口で「南無妙法蓮華経」と称える御題目によって。

これらの仏教はすべての人間が何らかの意味で仏になる方法を説きますが、また生きとし生けるものはすべて仏になることができるとも説きます。これは明らかに共生の原理が日本仏教において日本の神道と同じように存在しているということであり、もう一つの循環の原理もまたこのような鎌倉仏教においてははっきり主張されます。

このような循環の理論を説いたのは、浄土宗及び浄土真宗の祖師法然及び親鸞、特に親鸞であります。親鸞は二種廻向こそ浄土真宗の真髓であると言いました。浄土宗というものは法然が立てた仏教の宗派であります。法然は、人間が死んだ後に極楽浄土に行くことができるという信仰が既に根強く社会に存在していた時代において、この極楽浄土へ行く方法と考えられた念仏の解釈を一変させました。

源信などが『往生要集』で明らかにした念仏は、口で「南無阿弥陀仏」を称える口称念仏よりは、極楽世界の有様を頭で想像するという観念の念仏でありました。それを8世紀の中国の僧、善導の説にもっぱらよることによって、法然は念仏をもっぱら口で「南無阿弥陀仏」を称えるという口称の念仏に限りました。これによって念仏はどんな人間でも行ずることのできる易行となり、口で「南無阿弥陀仏」と言えば誰でも極楽浄土に行けることになりました。先に述べたように、仏教の根本原理の一つが平等ということであり、法然はこの平等の原理を浄土教が流行する日本の地に実現した仏教者であります。

この法然の思想を受けて、親鸞は還相廻向の説を唱えます。それは法然が主に「南無阿弥陀仏」を称えれば人間はすべて極楽浄土へ行けることを主張したのに対し、親鸞は、一度極楽浄土へ行った人は極楽浄土から再びこの世に帰ってくることを強調しました。親鸞によれば、人がいったん極楽浄土へ行っただとしても、この世に苦しむ人がいるかぎりには極楽浄土にとどまるべきではなく、この世で苦しむ人を助けるためにこの世へ帰ってこなければならぬというわけであります。親鸞によれば、阿弥陀様のお慈悲により、死ねば人は必ず極楽浄土に行くことができるが、また阿弥陀様のお慈悲により、この世の人を救うためにこの世に帰ってくることができるというのであります。

親鸞が言うように、これが浄土真宗の真髄であるとするれば、われわれはここにまた仏教の中に展開された循環思想をみるわけであります。この循環思想は神道の場合、血の原理によって子孫となって生まれ変わるのに対し、親鸞の場合は、法の原理によって血の原理を離れて生まれ変わってくるというのであります。それによれば、親鸞がアメリカ人に生まれ変わってアメリカで浄土真宗の法を説くということもあり得ます。

このようにみると、仏教の中にも共生と循環の原理が働いていることが分かります。これはおそらく土着の神道思想の影響ではないかと思えます。このような共生と循環の原理がどのように日本の芸術や文学に影響を与えているかは興味深い問題であります。時間がきましたので、私の話はこれで終わらせていただきます。

最後に一言言わせていただきますと、この共生と循環の原理は今後、地球環境破壊が21世紀の人類にとってもっとも重要な問題になるときに、なお未来の世界の文明の原理として十分意味をもつ原理のように思うのであり、日本の宗教思想の今後の人類に対する意味もその点に存在しているように思います。